

# 不登校生徒の進路選択およびそれにかかわる 学習支援に関する研究

大西正明

生徒の不登校の問題は現在、日本の社会問題の重要課題の一つとなっている。本県でも長期にわたり様々な取組みを続けているが、現在でもなお多くの課題を抱えている。本研究では、福井市内7名の教育相談担当者から過去の不登校生徒の事例について聞き取り調査をし、中学校における不登校生徒が抱える進路選択の課題とそれに必要な学習支援の方法を明らかにすることを試みた。さらには、定時制・通信制高等学校での不登校傾向生徒の支援の現状について、教育相談担当者を通して聞き取り調査を行うとともに、県内外の不登校生徒への支援状況も調べた。その結果、相談室等で支援員等の協力のもと、基本から学び直させたり、自治体や外部機関による支援体制づくりや進路選択のための中高連携をさらに進めたりする必要があることがわかった。

**<キーワード> 中学校、定時制・通信制高等学校、学習支援、進路、中高連携、教育相談担当者**

## I 主題設定の理由

「高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査」（平成20年度内閣府まとめ）によると、中学校で不登校傾向のあった生徒の場合は、2割近くの者が卒業後、就職も進学もしていない。一方、「就業構造基本調査」（平成19年総務省）の調査結果からは、上記調査の対象者とほぼ同年代の無業者のうち、家事も通学もしていない者の割合が全体の2.3%に留まっているのが分かる。このことから、中学校不登校生徒においては、いわゆるニートになっている割合が非常に高いことが分かる。このような状況から考えると、学校関係者として、中学校で不登校であった生徒の将来への進路につながる支援のあり方について探ることは喫緊の課題である。そこで、本研究では、中学校不登校生徒に対する支援の場として大きな役割を果たすことが期待される相談室での支援について調査・考察を行うことにした。

相談室での支援を大きく分類すると「適応指導」「学習支援」「進路指導」等がある。このうち「学習支援」と「進路指導」はどの学校でも取り組みやすく、必要にも迫られている。そこで、相談室における学習支援と進路指導の個々の事例と県内外の様々な機関による実践を調査し、どのような支援が生徒たちに必要であるのかを、多方面からとらえることをねらい、本主題を設定した。

## II 研究の目的

福井市内7中学校の教育相談担当者および、福井県内定時制・通信制高等学校1校の教育相談担当者から聞き取りを行った。その調査結果や県内外の自治体や適応指導教室における活動等から、教育相談活動における学習支援、進路指導（生徒の個性を尊重することによって、生徒が自らの生き方を考え主体的に将来の進路を選択できるように導くこと）の現状と課題を明らかにし、今後の教育相談活動を効果的に進めるための方策を検討する。

## III 研究の方法

### 1 中学校における聞き取り調査

今年度の福井市内の公立中学校教育相談担当者を訪問し、聞き取り調査を行う。各担当者がかかわった過去の不登校事例と相談室の運営について調査する。

## 2 定時制・通信制高等学校における聞き取り調査

福井県内定時制・通信制高等学校の教育相談担当者に中学校で不登校傾向にあった生徒の入学後の支援状況、卒業実績等を直接聞き取り、調査をする。

## 3 県内外の学習支援、進路指導状況調査

県内外の各地方公共団体等（京都市立洛風中学校の現地視察を含む）が実施している学習支援、進路指導について資料等（『研究紀要』第115号、福井県教育研究所、Webサイト）を調査する。

これら3つの調査を基に、不登校生徒の学習支援および進路指導の方向性を探る。この研究を図式化したものが以下の図1である。

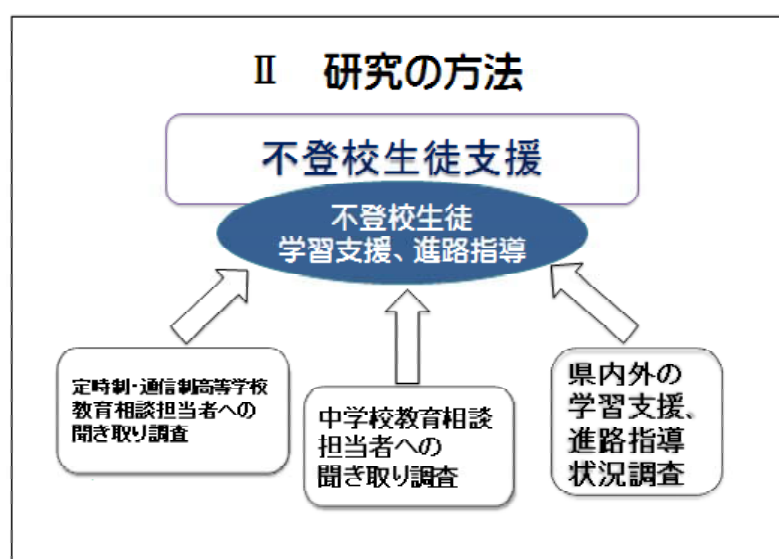


図1 研究の流れ

## IV 研究の結果と考察

### 1 中学校における不登校傾向生徒に対する学習支援・進路指導についての聞き取り調査結果

#### (1) 聞き取り調査の方法

福井市内の中学校の教育相談担当者のうち、比較的担当年数の長い教員10名に研究協力を依頼し、7中学校の7名の担当者から協力を得た。過去の不登校事例（全38事例）の対象はすべて中学校卒業生とし、担当者によっては前任校での事例も調査対象に含めた。相談室の運営については学習支援と進路指導について実践例、課題等を調査した。調査は平成22年8月から11月にかけて実施した。事前に質問項目を用意して行った（資料1）。

#### (2) 不登校生徒の事例について

##### ① 不登校のきっかけ

生徒が不登校になったきっかけと考えられることで最も多かったのが「その他本人にかかわる問題」21件（37%）。次に多かったのが「いじめを除く友人関係をめぐる問題」11件（19%）であるが、3番目に「いじめ」とならんで「学業の不振」が7件（12%）あった（図2）。「児童・生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（平成21年度福井県教育庁まとめ）」（図3）と比較しても同じような結果が得られている。このことにより、基礎学力の不足が不登校のきっかけの一つとなっていることがわかった。

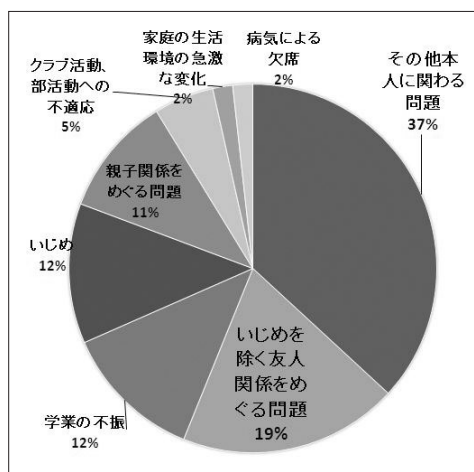


図2 不登校のきっかけ (複数回答) n=38

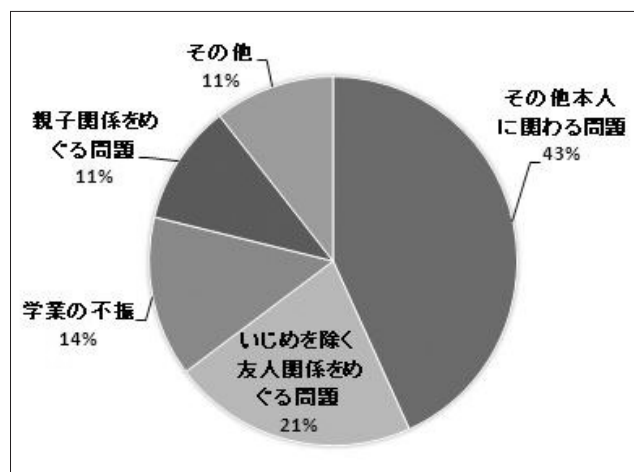


図3 不登校のきっかけ H21福井県 (複数回答) n=565 (その他以外)

② 出欠状況

対象生徒は中学校2年生まで不登校ではなかった生徒、つまり3年生から不登校になった生徒が18%で、2年生から不登校になった生徒が29%、そして1年生およびそれ以前に不登校になった生徒が半分近くを占めた(図4)。また、3年生時には7割近い生徒が何らかの形で相談室に登校している(図5)。このことから、「相談室」での支援を考えることはとても大切であり、生徒にとっても重要な場所であったと言える。

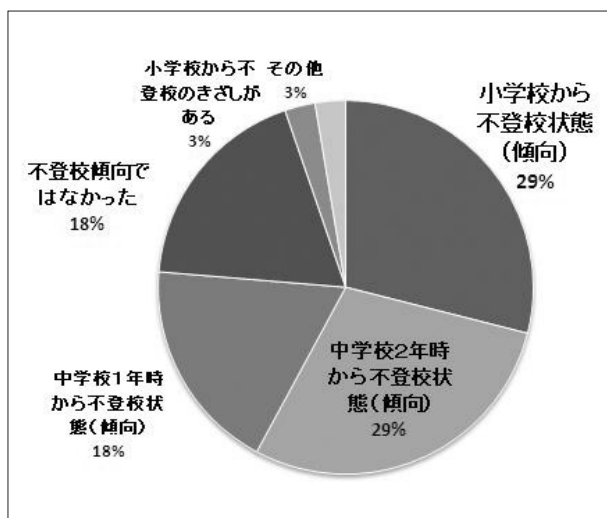


図4 不登校状態 (~2年生) n=38

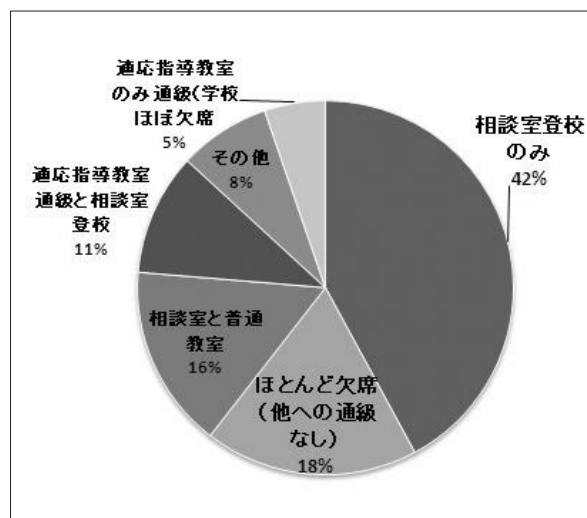


図5 不登校状態 (3年生時) n=38

③ 進路状況

対象生徒の場合、進学先は私立と県立定時制・通信制の人数が同数で、この2つで80%近い(図6)。これは福井県の場合、保護者も含めて県立全日制への進学志向が強いことから、中学校入学当初の希望とは異なる可能性も高い。しかしながら、最終的に70%の生徒が進路先について満足していると教育相談担当者はとらえている。これは不登校状態にある自分と学力のバランスを考慮しながらも、進路指導などの支援が適切であったことが推測される。ただ、「納得はしていない。仕方なく」「満足できない」が合わせて25%であるという結果も無視できない(図7)。このような生徒たちの割合を少しでも減らしていける学習支援のあり方を考えていかねばならない。

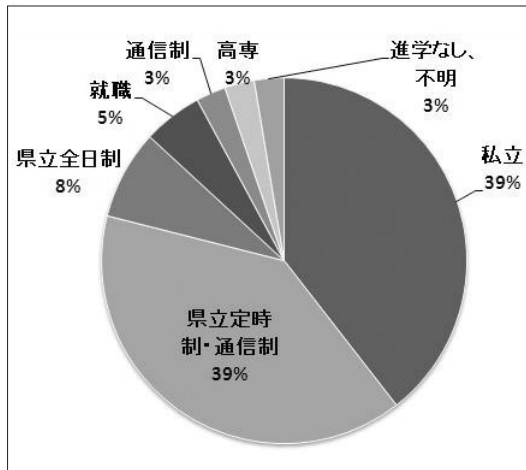


図6 進路状況 n=38

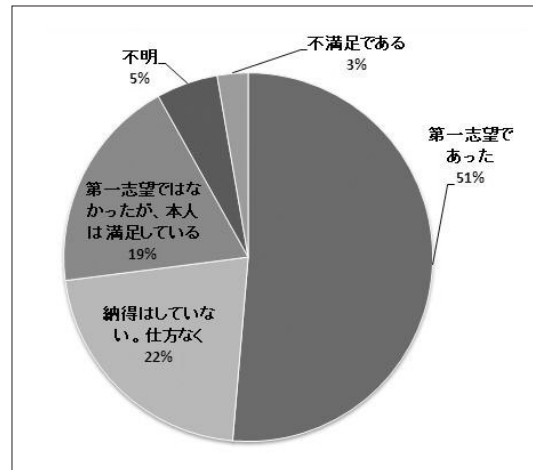


図7 進路先について n=38

④ 学習状況

相談室での対応者は「教員およびその他支援員」がほとんどを占めると考えていたが、教員の場合も多かった(図8)。これは現在、高校2年生以上の生徒(20名)においては、学校によって支援員が配置されていない場合が多かったことに起因している。つまり、対象生徒の年齢によって学習状況が異なってしまったわけである。高校1年生の生徒のデータから判断すると、現在では何らかの形で支援員やSCに支援を受けている生徒が多いと思われる。すなわち、相談室での学習は教員を始め、支援員等多くの人の指導によって支えられていると考えられる。

学習の内容については、得意科目を中心に勉強していた生徒が多いのではないかと予想していたが、むしろ5教科をバランス良く勉強していた生徒が多かった(図9)。これは入試に対する生徒の意識が3年生になって高まるということと、教員同士や支援員等との連携など、相談室の運営がうまくいっていたことが背景にあるのではないかと推測できる。

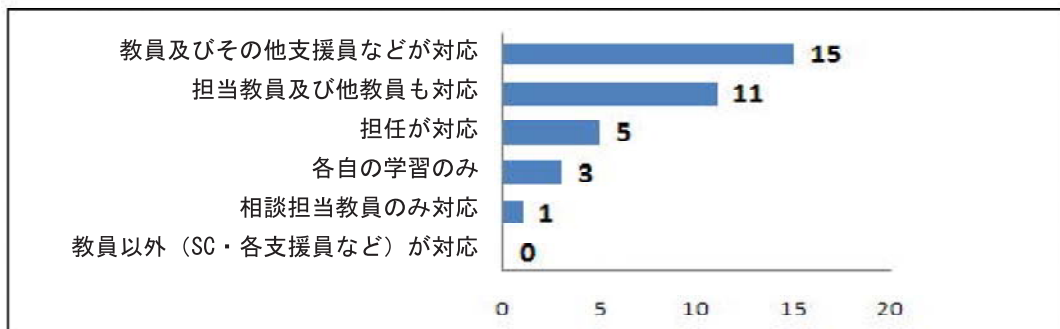


図8 相談室での対応 n=35

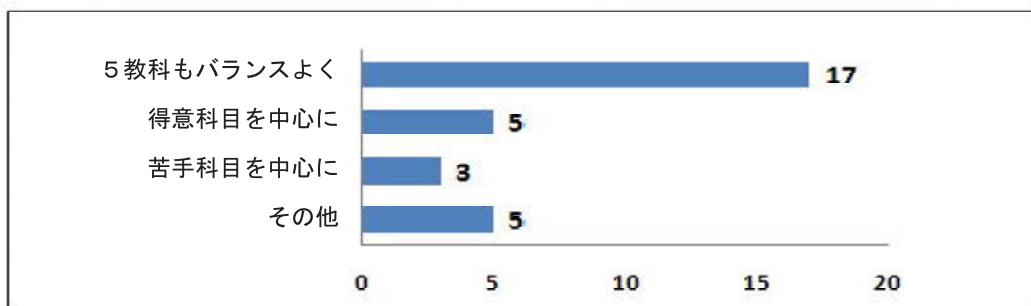


図9 学習内容 n=30

家庭学習については学習をしている生徒とそうでない生徒に大きく分けられた（図10）。「不明」にはおそらく学習がなされなかった事情が多いと思われる。「家庭内対応」にしても学校での学習以上に頑張ることができる生徒はそう多くはないと考えられる。さらには家庭教師についたり塾に通ったりする生徒もかなり少ない結果となった。このことは経済的理由によるところが大きいと思われるが、やはり外部との接触を拒む生徒が多いことも大きな原因であろう。

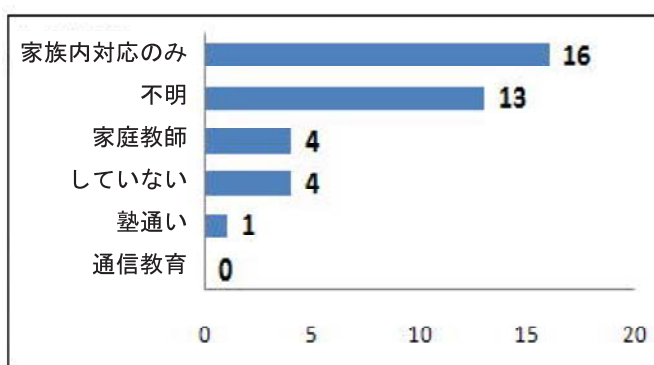


図10 家庭での学習状況 n=38

### (3) 相談室における学習指導上の問題点

相談室内で学習指導を行う上で、担当者が日ごろから問題として考えていることで最も多かった意見は「担当教諭、支援員の数が不足している」「個人差が大きく指導がしにくい」の2つであった（図11）。これは調査した学校すべての担当者が感じている。具体的には「相談室に入る先生の担当教科が限られている。バランス良く先生方に入ってほしい」「学習指導に不慣れた支援員がいる」「教科による興味・関心の差があるため、一斉指導がしにくい」「一人ひとりの希望をかなえた指導をすることが

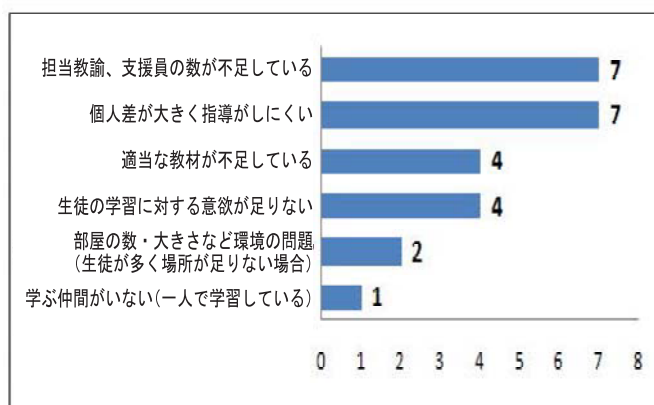


図11 学習指導上の問題点（複数回答） n=7

難しい」などがある。また、「適切な教材が不足している」では、「小3、4年からの教材がない」「プライドが高く小学校の問題に抵抗を示す」「学力に見合うような、それでいて達成感を得られるような教材が欲しい」という意見があった。

これらの中でまず注目したいのが、「支援員の不足」である。県の「学級復帰支援員（教員OB）」福井市の「いきいきサポーター」など、各市町では支援員が配置され始めたが、学校側の要望を十分に満たす人材を確保することは大変難しいと思われる。学校だけでは工夫・改善しきれないことであり、行政側の協力・支援が求められる。それに対し、教材の不足に関しては教員側の努力も要求される。例えば、学年間、さらには学校全体の支援体制、小中連携も含めた学校間の協力、研究所の教材研究支援システムの利用など、各教育相談担当教員を支えるネットワークが必要と考える。これらのことを工夫することによって、生徒の意欲や学力の違いからくる個人差への対応もしやすくなるはずである。

### (4) 相談室において学習支援や進路指導などをする上で工夫していること、気をつけていること

#### ① 学習支援

学習内容・学習方法、学習システム、指導者という観点で以下の表1にまとめた。

表1 学習支援の例

|      |   |
|------|---|
| 学習方法 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・国数英を基本（受験科目）にしているが、得意な教科から取り組ませている。</li> <li>・漢字と計算（かけ算が苦手）をまず練習する。英語は1年生に戻って勉強する。</li> <li>・数学は小学校でつまづいている生徒が多く、できるところから始める。</li> <li>・勉強を避けている生徒も多いので、自分で内容（個人に合ったペースで）を決めさせる。</li> </ul> |
|------|---|

|        |   |
|--------|---|
|        | 無理強いはいしない。<br>・リズムに乗ってきたら他教科にも取り組ませる。   |
| 学習システム | ・時間割を決める。5教科は午前中にする。50分のうち前半は指導、後半は気楽に学習する。<br>・相談担当は担当教員と相談しながら年間カリキュラムから取り残されないよう配慮する。  |
| 指導者    | ・他の教員に支援をお願いしている。5教科週2時間ずつ教科担当の教師が授業に入る。9教科すべて入ってもらう。<br>・教科担当の先生と協力して学級復帰支援員（週3日午前中）や大学院生が学習指導支援を行っている。手すきの学年の先生に相談室へ来てもらう。<br>・常駐の支援員が配備されてからは各教科一人ずつのみ入る（それまでは数多くの先生に協力してもらい負担が大きかった）。 |

相談室では担当教科以外の教員が指導するなど教科の偏りが生じている学校もあるが、学力面を考えて個に応じた指導をしていること、工夫された内容を各教員が実践していること、また、多くの関係者に協力をお願いしていることを改めて確認できた。さらには学力が身につかないと教室へ戻ることは大変難しいということも教育相談担当者が感じていることが分かった。

## ② 進路指導

不登校の生徒は進路選択の幅が極端に狭くなっている場合が多い。しかし、3年秋になれば高校へ行きたいという意志を示す生徒がほとんどである。そこで、どの学校も体験入学や面接練習に行けるよう支援している。面接練習も一般生徒と同様に行っていたり、学年集会などの全体指導にも必ず参加させて進路等の話を聞かせたりしている。現状から無理をせず学力に見合う高校を薦めるなど、幾つかの実践を調査することができた。また、「入試」は生徒を一步前進させるためのきっかけになると感じている担当者も多かった。

## ③ その他

学年全体の話は必ず聞かせる（列の後ろなどに座らせて）。個別指導は担任と相談しながら主任や副担任が担当し、SC、ライフパートナー（大学生による不登校支援事業のことで学習支援など様々な個別支援を行っている）にも協力をお願いしている。必ず誰かは相談室にいるようにしている。あいさつをすること、人を思いやることを心がけさせることなどがあった。

①、②、③のことは学校の状況によって条件が異なるため、すべての方法を取り入れることはできないが、各学校の先生方ができる範囲で取捨選択をし、その中から有効な方法や手段を導き出すことが今後も必要になってくるであろう。

## 2 定時制・通信制高等学校における不登校経験生徒の入学後についての聞き取り調査結果

### (1) 聞き取り調査の方法

福井県内定時制・通信制高等学校の各教育相談担当者2名に、中学校において不登校を経験している生徒の入学後の支援について調査を実施した。特に平成18年度入学生（平成21年度卒業生）と平成22年度入学生、途中転学・転入生を対象に事前に用意した項目（資料2）に従って平成22年7月に学校へ訪問し、直接質問を行った。調査に時間を要する項目もあったため、回答結果は後日回収した。

### (2) 平成18年度入学生（平成21年度卒業生、途中入学者を除く）について

入学時の生徒の中で中学校時に不登校を経験している生徒の割合は定時制で28人、全体で47%（図12）、通信制で13人、同57%であった（図13）。定時制・通信制ともに不登校経験者が多いことがわかった。

その不登校経験者の中で4年後に卒業できた生徒は定時制で9人（不登校経験者全体の32%）であった。通信制は在学期間が生徒によって様々であるため、その年度の卒業生が何人とは答えられないとのことであった。特に通信制の場合は実際に活動している生徒以外に、在籍はしているが受講登録をしていない生徒がおり、数字で表すことが難しい状況となっている。

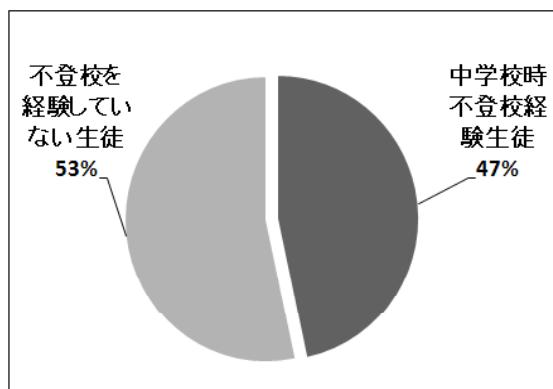


図12 不登校経験生徒の割合(定時制)  
n = 60 (平成18年度入学生)

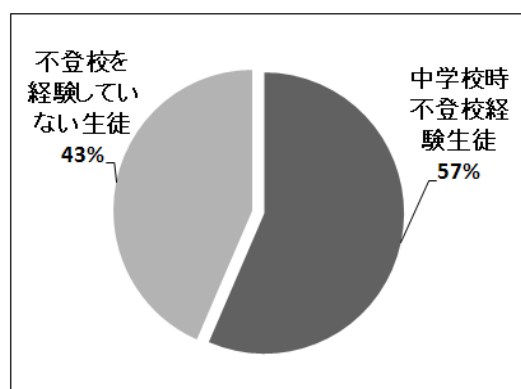


図13 不登校経験生徒の割合(通信制)  
n = 23 (平成18年度入学生)

次に、卒業できた生徒とできなかった生徒それぞれについて、その主な要因として考えられる上位の理由3つについて調査したところ以下のような結果となった(表2)。

表2 卒業できた要因とできなかった要因

|            | 定 時 制  | 通 信 制  |
|------------|--|--|
| 卒業できた要因    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学業の頑張り(就職、進学に対する熱意等)</li> <li>・個人の内面的な要因</li> <li>・学校関係者の支援</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・環境の変化</li> <li>・学校関係者の支援</li> <li>・級友等の支え</li> </ul>       |
| 卒業できなかった要因 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・交友関係</li> <li>・親子関係</li> <li>・不登校状態(原因がはっきりしない)</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・交友関係</li> <li>・学業不振</li> <li>・不登校状態(原因がはっきりしない)</li> </ul> |

表2によると卒業できた要因は、定時制も通信制も個人的な頑張り、変化、周囲の支えがエネルギーの源の一つになっているようである。一方、卒業できなかった要因は、定時制は主に個人的な要因が左右している可能性が高い。それに対し、通信制は学習システム上の関係もあるが、長期的な不登校によって基礎学力が不足している生徒(不登校を経験していない生徒と比べると特に英語・数学の学力が低い)の割合が高いために、「学業不振」が要因の一つになりやすいのではないかと考えられる。このことから、本研究のテーマである「学習支援」を不登校生徒が特に増加する中学校時代に十分に行う必要性を改めて感じた。

また、定時制も通信制も個々の生徒に対し、学校関係者が全日制高等学校以上に手厚い支援を続けていることが分かった。ただ、通信制に通う生徒は登校日が少ないため、学校関係者の支援の機会がどうしても減ってしまうことが悩みであることも分かった。

今後、卒業を支援するために特に必要と感じていることについては、両制とも「家庭との連携」を共通して挙げている(表3)。既に多くの支援、指導を行っている状況の中で最も難しいことであり、外部機関との連携や進路指導も含め継続的に行わなくてはならないことであることが分かった。

表3 今後卒業を支援するために特に必要と思われる方法

| 定 時 制   | 通 信 制   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活面の指導、支援</li> <li>・家庭との連携</li> <li>・相談機関、医療機関との連携</li> <li>・就職、進学等の進路指導</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭との連携</li> </ul> <p>(上記のこと以外は既にも実践しているため今後特に必要とは思っていない。)</p> |

## (3) 平成22年度入学生について

## ① 生徒の状況

生徒の中で中学校時に不登校を経験している生徒の割合は定時制で5割近く。通信制では6割以上であった。平成18年度入学生に比べ定時制はあまり変わらないが、通信制は割合が増加している。不登校を経験していることを高校側が最初に確認できた状況、上位2つについて調査したところ、定時制、通信制ともに相談室が独自に依頼した健康調査票が1番目、本人・保護者からの聞き取りが2番目であった。これは中学校側が、調査書にあえて欠席理由を記載をしていないことによる。つまり中高の連携という意味では、詳細な情報の交換が不十分な状態であると考えられる。

そのため、教育相談担当者は、入試後、入学前（3月中）の中高連絡会で共通理解を図ること、中学校在籍時にかかわっていた適応指導教室などの相談機関との連絡会を設けること、4月の年度当初での連絡会（進路指導主事や担任等を対象）が必要であると感じている。

## ② 入学後について

一般生徒に比べ、不登校経験者については、「授業内容についていけるか」「教職員、学年、クラスとの交流の中で人間関係を上手につくれるかどうか」「定時制高校の生活リズムに適應できるか」を特に心配している。そのための支援策として、入学後、個人的に担任等が面談を行ったりするなど、個人の状況に合わせ、個別に対応できるように学校側は努力を続けている。学習に関しては、あくまでも個人対応であり、不登校の経験の有無にかかわらず分け隔て無く個別支援を行ったり、必要に応じて複数で支援したりしている。

また、中学校の担当者の「高校へ行っても出席率が悪くなり単位が取れない生徒が多いので、先生も含めていい出会いを経験してほしい。将来の支えになるためにも生徒への働きかけを多くしてほしい」という声に対して、高校側も何度も面談を繰り返すなど、温かくて地道な支援・配慮を継続して行っていることも分かった。逆に高校側から、発達障害等、その他の原因により、教室で授業を受けることが困難である生徒の入学については、中学校側も十分に検討を重ねてほしいという意見もあった。結局、支援は継続しても最終的に休学状態になってしまうという状況を何とかしたいという教育相談担当者の「思い」も理解できた。だからと言って他に選択可能な進路を見つけられるのかという問題もあり、中学校と高校側の綿密な連携が望まれる。

## (4) 他校からの転入生について（平成22年8月末現在）

定時制では中退等の時期については不明だが、高校1年時に2人、2年時に1人転入している。転入理由としては家庭の事情、学校不適應、新しい環境を求めてなど様々なものがある。通信制では高1の時に中途退学した経験を持つ生徒が多いが、中学校時に不登校を経験している割合が7割近い。つまり、不登校を経験した生徒が一旦は全日制に入学しながら途中で断念するケースも少なくはないということである。また、平成21年度に卒業できた生徒は定時制では0人、通信制では単位の習得がばらばらなので、何年度の生徒が卒業という表現はやはりできないということであった。入学後に心配されることや支援方法については他の生徒と変わることはないとの話であった。

**3 福井県内の学習・進路指導体制**

## (1) フレンド学級での実践

開級日の10時～10時50分の時間帯に「マイスタディタイム」を設定。各児童・生徒が教科や学習内容を選択。指導員は状況に合わせて個々の個別指導を行っている。また平成20年度より研究所の教材研究支援システムが本格的に始動。その一環としての教材（プリント等）をその「マイスタディタイム」に利用している。特に教材の準備が難しい通級生にとっては貴重なものとなった。解答も最終的には満点で返せるよう配慮しており、子どもたちの満足度をより高めることを目標としている。

また、進路支援として中学生を対象に高等学校訪問を行っている。平成19～21年度には定時制高等学校、市内私立高等学校2校の学校見学を行った（平成22年度は定時制高等学校のみ実施）。平成19年



度以前でも、体験入学、学校説明会に指導員が同行していた。他にも模擬面接を行うなど個々の進路希望に合わせて、学校と連携を取りながら話し合いをもっている。

(2) 他適応指導教室等の状況

県内のすべての適応指導教室では、学習について児童・生徒の状況に合わせて適切な時間を設定している。〈山口芳江（2010）「不登校児童・生徒の学級復帰に向けた援助に関する研究」『研究紀要第115号』福井県教育研究所〉内容的には5教科の個別学習が中心だが、部分的に一斉学習の時間を設けている教室もある。結局、どの教室でも基本的には個々の状況に合わせた学習支援体制ができており、5教科以外でも、創作、絵画、軽スポーツなどを組み合わせた体験的な学習も行っている。

(3) ライフパートナー事業

平成5年より大学生による不登校支援事業（ライフパートナー派遣事業）がスタート。18年目を迎える。現在では5市の教育委員会が参加。1年間で活動する学生は約130名で、対象児童生徒も年間200名を越える。

4 県外の主な学習支援・進路指導體制について

主な自治体の支援体制と実際に現地視察を行った京都市立洛風中学校教育概要について報告する。

(1) 主な自治体の支援体制

学習支援員の派遣、IT等の活用、適応指導教室と学校の連携、進路指導、若者自立支援、公立学校等の設立という観点でまとめたのが表4である。なお、対象とした自治体は広くWebサイト等を調査して研究者の判断で選択したものである。

表4 不登校傾向生徒に対する支援

| 支援形態          | 支援内容   | 支援回数や時間帯                 | 支援場所             | 支援対象             | 実施自治体        |
|---------------|--|--------------------------|------------------|------------------|--------------|
| 学習支援員の派遣      | 授業   | 放課後や夜間                   | 学校               | 中学校3年生           | 長野県          |
|               | 学習ボランティア体制                                       | 計画推進中                    | 特定地域             | 児童・生徒            | 長野県          |
|               | 学習支援   | 1日2時間程度、週1回～2回、2か月間程度の範囲 | 自宅               | 児童・生徒            | 鹿児島市         |
| IT等を活用した学習支援  | 電子メールやFAX、オンライン教育ソフト利用、テレビ会議システムの活用              |                          | 学校・適応指導教室・自宅     | 児童・生徒            | 文科省IT特区指定自治体 |
|               | 学習支援   |                          | 適応指導教室           | 児童・生徒            | 豊島区・松原市・浦添市等 |
|               | eラーニングの活用（教科型学習支援）                               | 随時                       | バスリード等があれば随時     | 児童・生徒            | つくば市         |
| 適応指導教室と学校との連携 | 担任や教科担当者の来室。通知表の作成。                              | 随時                       | 適応指導教室           | 児童・生徒            | 大阪府          |
|               | 学習到達度を学校に伝える。実力テストの実施。                           | 随時                       | 適応指導教室           | 中学校3年生           | 大阪府          |
|               | 進路指導（学校訪問や進路ガイダンス、職場体験学習）                        |                          | 適応指導教室           | 中学校3年生           | 大阪府          |
|               | 学校での学習内容と学習進度、授業で活用した学習プリント等について日常的に情報の提供を行っている。 | 随時                       | 適応指導教室           | 児童・生徒            | 北海道          |
| 進学説明会の開催      | 高校の状況や学力検査に関する個別説明会                              | 11月～                     | 長野合同庁舎等教育所       | 中3生徒・保護者         | 長野県          |
| 若者自立支援        | 学び直しや就労に向けた誘導・支援                                 | 随時                       | 県教育委員会や関係機関による連携 | ニートや引きこもり傾向にある若者 | 高知県          |
|               | 進路等に関する個人面談就労支援                                  | 随時                       | 札幌市内高等学校         | 高校生              | 札幌市          |
| 公立学校設立        | 「兵庫県立A学園」体験活動・共同生活                               | 2年間の入寮                   | 全寮制フリースクール       | 20歳未満            | 兵庫県          |
|               | 京都市立洛風中学校  | 通常の中学校と同じ                | 中学校              | 京都市中学生           | 京都市          |
|               | 八王子市立B学園   | 通常の小中学校と同じ               | 小中学校             | 小中学生             | 八王子市         |

(2) 京都市の実践（平成22年12月学校視察）

不登校の子どもたちのための新しい中学校（不登校生徒学習支援特区中学「京都市立洛風中学校」）を教育相談総合センター内に創設（平成16年10月開校）。不登校の子どもたちの進路展望を切り拓くために、企業、NPOなど民間分野との連携を中心に、実社会と直結した実践的な体験活動を実施し、将来の職業選択も含めた動機付けを図っている。

将来への進路を考える上で揺れ動く思春期をしっかりとサポートし、一人ひとりの個性に応じた学習支援を実施する。「新中学校」では、午前中2時間（始業9時30分）、午後2時間を基本に設定。現行（980時間、平成22年度）より少ない年間770時間に設定。特色ある教科、時間として「創造工房（音楽、美術、技術・家庭を統合し、京都の伝統・文化を教材にした表現・製作・鑑賞学習を取り入れた学習）」「科学の時間（社会、理科を統合し、歴史・地理・文化・自然についての調査・見学、観察・実験学習などを取り入れた学習）」「ヒューマン・タイム（仲間づくり、野外活動、社会体験活動など）」を設定している。

上記学習のほか、実践的体験に触発された「学ぶ力」を活用して、基礎学力の充実に向けた「少人数による学年を超えた習熟度別の学習」を行っている。

具体的には国数英と科学の時間は4グループ（3年A、3年B、2年、1年）、保健体育・創造工房・総合的な学習の時間・ヒューマンタイムは2グループ（3年、2年+1年）の学習グループを編制。国数英は教科2人（ティーム・ティーチング）その他は3人が担当。実質は学生ボランティアなども含め、多くの指導者が指導している。また、全校生徒を4つの縦割りグループ（1グループ10名～11名）に分けている。男女ペアのスタッフで担当。ヒューマンタイムや行事の時にこのグループで活動している。

進路状況としては、私立全日制高校・専門学校と私立通信・単位制高校への進学がほとんどを占めている。公立全日制へは毎年2人～4人、公立の定時制・通信制へは毎年2～3名が進学している。進学無しは毎年1～2名程度。このことは私立高校の方が受験日が先であり、公立が1回しか受験のチャンスがないということが影響している。その他にも学力面で遅れているということ、私立高校の方が不登校生徒の入学に配慮があるという理由もある。経済的には奨学金など免除等を駆使して（5割以上が就学援助の対象世帯）学校側も支援をしている。

## V 研究のまとめと課題

実際に学校現場へ訪問し、教育相談担当者に直接話を聞くことで、単に記入するだけのアンケートの言葉や数値だけでは計り知れない担当者の意識や意気込み、悩みや要望など生の「声」を聞くことができた。個人情報ということもあり、多数の事例を調査することができなかったことは課題として残るが、「不登校」によって生徒は学習環境を悪化させ、進路選択に支障をきたしているということがはっきりと分かった。

そこで、これまで行った調査活動から、中学校での学習支援をより効果的に進めるために、そして進路選択の不安を解消させるためには、どのような取組みや工夫が必要であるかをまとめた。

### 1 相談室における学習支援、進路指導

- (1) 不登校生徒にとって相談室での学習は、最も身近なものであり、現実的であり、効果が期待できる基本的な支援である。支援者（教育相談にかかわる全ての教員、支援員等）は個人の状況に合った学習教材を選択し、無理のないペースで、まずは出来るところから始めさせる。少しずつ段階を経てから次へ進ませる。早い段階から始めることで、進路選択に余裕を持たせる。高校側としっかりと、情報交換を行い、入学後の支援方法を話し合う。教材については本研究所の教材支援システムを始め、小学校など外部への協力も求めることなどが考えられる。

- (2) 教育相談担当者は時間割を作成し、各教科の教員に均等に担当してもらう。学校全体としての協力的体制を整える。教育相談担当者に負担をかけすぎないように配慮する。
- (3) 学校はSC、支援員を積極的に活用する。特に支援員は卒業後の精神的な支えにもなっている例があり、支援員の確保など、自治体への働きかけも十分に行う。それが学校の教員の負担軽減にもつながり、生徒との対応という面でも余裕が生まれる。また、地域や、外部に協力者（医師や教員OB、体験活動をお願いできる人材など）を求めることも重要である。

## 2 その他の学習支援、進路指導

- (1) 学校や自治体は放課後や夜間に授業を行う。そのための支援員を派遣する。もしくは地域にお願いし、学習ボランティア体制を整える。
- (2) IT等、特にコンピュータを利用したオンライン教育ソフトを自治体や適応指導教室が利用する。これは自治体等でのシステムの構築も要求される。
- (3) 学校は外部機関との連携を行う。適応指導教室などに学校での学習内容と学習進度、授業で活用した学習プリント等について日常的に情報の提供を行う。自治体が保護者の要請に応じて自宅等に学習支援員を派遣する。不登校生徒と保護者を対象とした、進路相談、就労支援等を自治体が行う。
- (4) 自治体が不登校生徒を対象とした公立の中学校、フリースクール等を市中心部の休校（将来的に）になった校舎や空き施設を改修するなどして設立する。進学や就職に不利にならないよう支援を行う。

## 3 中高連携について

卒業後の支援は中高連絡会はあるものの、高校側にほぼ任されている状態である。中学校側では生徒が支援員とメールを交換したり、担当者の所へ遊びに来る程度である。すなわち中高連携は現時点では不十分な状態であり、今後も改善の余地が大きいと言える。これからは中高連絡会を入学後や定期的に行うシステムを整え、休学、中退した場合の転学・就労支援につなげられるような体制が必要である。この場合、中学校側が安心してどこまで個人データを提出できるか、またその個人情報の管理をいかに高校や自治体が行えるかという問題も生じる。また、中学校の進路を選択する段階で、例えば発達障害の疑いのある生徒を支援できる体制が整った進路先を気軽に紹介してもらえそうな相談ネットワークが身近な地域にあれば、より適切な進路を導き出せると考える。そのような支援体制づくりを行うことで入学後の不適応や二次障害を少しでも減らすことができると思われる。

福井県教育庁は平成22年10月に「すべての児童生徒が『笑顔で登校』できるために」と題して不登校対策支援を明示した。不登校を生まないための未然防止、初期対応、自立支援の三つのシステムを機能させての対処方針である。学校側も継続してきめ細かな支援を行っているのは事実であるが、残念ながら深刻な不登校状態をきたした生徒を手厚く支援するためには、学校だけで対応するには限界がある。外部の協力や支援が必要となる。特に学習支援、進路指導を行うためには、以下のような対応が必要と考えられる。

- (1) 中学校や高等学校が互いの立場を理解し、情報を共有しようという意識を強く持ち、継続した支援を実践すること。
- (2) 不登校生徒の支援について自治体の理解を得ること、開かれた学校を目指し、外部支援者の協力も広く求めること。
- (3) 中学校卒業後や高校中退後でも進学、就職支援できる体制をつくること。

これらの実践によって不登校生徒の将来を見据える強固な土台が出来上がっていくと考える。

最後に本研究の実施にあたり、定時制・通信制高等学校、福井市内7中学校の教育相談担当の先生方には、御多忙の中、研究協力員として多大なる御協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

《参考文献》

- 内閣府(2009、2月～3月実施)『高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査』
- 総務省(2007)『就業構造基本調査』
- 文部科学省、福井県教育庁(2009)『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』
- 文部科学省、福井県教育庁(2010)『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』
- 山口芳江(2010)「不登校児童・生徒の学級復帰に向けた援助に関する研究」『研究紀要』第115号、福井県教育研究所
- 内閣府(2008)特集『高校中退者・中学校不登校生徒の「その後」と地域における支援』

(資料1) 中学校教育相談担当者への質問事項

これまでに先生が担当された不登校及びその傾向にあった生徒についてお聞きします。

1 不登校のきっかけ

|                   | 生徒A(男子・女子) | 生徒B(男子・女子) |
|-------------------|------------|------------|
| ①いじめ              |            |            |
| ②いじめを除く友人関係をめぐる問題 |            |            |
| ③教職員との関係をめぐる問題    |            |            |
| ④学業の不振            |            |            |
| ⑤クラブ活動、部活動への不適応   |            |            |
| ⑥学校のきまり等をめぐる問題    |            |            |
| ⑦入学、転編入学、進級時の不適応  |            |            |
| ⑧家庭の生活環境の急激な変化    |            |            |
| ⑨親子関係をめぐる問題       |            |            |
| ⑩家庭内の不和           |            |            |
| ⑪病気による欠席          |            |            |
| ⑫その他本人に関わる問題      |            |            |

2 不登校状態について(3年生時)

|                     |  |  |
|---------------------|--|--|
| ①ほとんど欠席(他への通級なし)    |  |  |
| ②適応指導教室のみ通級(学校ほぼ欠席) |  |  |
| ③適応指導教室通級と相談室登校     |  |  |
| ④相談室登校のみ            |  |  |
| ⑤相談室と普通教室           |  |  |
| ⑥その他( )             |  |  |

中学校2年生までの様子

|                    |  |  |
|--------------------|--|--|
| ①小学校でのきざしはない       |  |  |
| ②小学校から不登校のきざしがある   |  |  |
| ③小学校から不登校状態(傾向)    |  |  |
| ④中学校1年時から不登校状態(傾向) |  |  |
| ⑤中学校2年時から不登校状態(傾向) |  |  |
| ⑥( )年生からやや欠席多      |  |  |
| ⑦その他( )            |  |  |

3 適応指導教室通級生徒の通級状況について

| 3年生時について                   |  |  |
|----------------------------|--|--|
| ①登校日(曜日)1回も休まず通級(欠席は月2日以内) |  |  |
| ②出席の方が多。欠席月3日～             |  |  |
| ③ほぼ出席と欠席が同じくらい             |  |  |
| ④欠席の方が多                    |  |  |
| ⑤ほとんど欠席                    |  |  |
| ⑥不明                        |  |  |

4 進路について

| 高等学校進学            |   |   |
|-------------------|---|---|
| ①県立全日制( )科        | 科 | 科 |
| ②私立全日制( )科        | 科 | 科 |
| ③定時制・単位制(科、コースなど) |   |   |
| ④通信制              |   |   |
| ⑤広域通信制(通学タイプ)     |   |   |
| ⑥県外高校( )科         |   |   |

その他(高卒資格がとれない)

|           |  |  |
|-----------|--|--|
| ⑦専門学校     |  |  |
| ⑧フリースクール等 |  |  |
| ⑨その他( )   |  |  |
| ⑩進学なし、不明  |  |  |
| ⑪就職       |  |  |

最終進路先について

|                        |  |  |
|------------------------|--|--|
| ①第一志望であった              |  |  |
| ②第一志望ではなかったが、本人は満足している |  |  |
| ③納得はしていない。仕方なく         |  |  |
| ④不満足である                |  |  |
| ⑤不明                    |  |  |
| ⑥その他( )                |  |  |

5 学習について

(1)相談室内での学習対応について(相談室等へ登校したことがある生徒)

|                     |  |  |
|---------------------|--|--|
| ①各自の学習のみ            |  |  |
| ②相談担当教諭のみ対応         |  |  |
| ③担当教諭及び他教諭も対応       |  |  |
| ④教諭以外(SO・各支援員など)が対応 |  |  |
| ⑤教諭及び他支援員などが対応      |  |  |
| ⑥その他( )             |  |  |

(2)学習内容について(相談室等へ登校したことがある生徒)

|             |  |  |
|-------------|--|--|
| ①苦手科目を中心に   |  |  |
| ②得意科目を中心に   |  |  |
| ③五教科をバランスよく |  |  |
| ④その他( )     |  |  |

(3)家庭学習について(相談室等へ登校していない生徒も含む)

|            |  |  |
|------------|--|--|
| ①塾通い       |  |  |
| ②家庭教師      |  |  |
| ③通信教育      |  |  |
| ④家庭内対応のみ   |  |  |
| ⑤不明・その他( ) |  |  |

(4)相談室等へ登校できない生徒に対する学習支援について(相談室等へ登校していない生徒)当てはまる項目すべてに○をつけてください。

|                       |  |  |
|-----------------------|--|--|
| ①定期的にプリント等を自宅に持って行った。 |  |  |
| ②定期的にプリント等を郵送・FAXした。  |  |  |
| ③自宅での対面指導を行った。        |  |  |
| ④その他( )               |  |  |

(5)学習指導・進路指導で力を入れていることや、工夫されていること、気をつけていることがありましたら具体的に教えてください。

|  |
|--|
|  |
|--|

(6) 相談室等で学習指導を行う場合、どのような課題があると思われますか。

- ①個人差が大きく指導がしにくい
- ②生徒の学習に対する意欲が足りない
- ③担当教諭、支援員の数が不足している
- ④適当な教材が不足している
- ⑤部屋の数・大きさなど環境の問題(生徒数も多く場所が足りない場合も含む)
- ⑥その他( )

6 その他生徒に対する働きかけで工夫されていること、気をつけていることがありましたら具体的に教えてください。

|  |
|--|
|  |
|--|

7 卒業後(1年～2年程度の間)の生徒に対する支援について当てはまる項目すべてに○をつけてください。

|                           |  |  |
|---------------------------|--|--|
| ① 面談・電話等で相談にのっていた。(本人・家族) |  |  |
| ② 進学・就職先と連絡を取り合っていた。      |  |  |
| ③ 進路に由来する範囲で会話を続けた。       |  |  |
| ④ 連絡等もないので特に支援は行ってない。     |  |  |
| ⑤ 異動等で連絡等が途切れた。           |  |  |
| ⑥ その他( )                  |  |  |

(資料2) 定時制・通信制高等学校教育相談担当者への質問事項 NO. 1

中学校時に不登校及び不登校傾向であった生徒の高校入学後の追跡調査(聞き取り)

※ この場合の不登校及び不登校傾向生徒とは、調査書、中高連絡会、電話による聞き取り、本人との面談等で中学校時に不登校状態を経験していることが明らかになった場合を指します。調査上ではそのような状態であった生徒を詳しく、中不生徒と呼称することとします。

定時制・通信制全体もしくは定時制・通信制別々のデータをお願いします。

◎ H21年度卒業生(H18年度入学生)についてお聞きします。(途中入学者を除く)

① 入学時の人数  
 ② そのうち中不生徒の割合(人数)  
 ③ 卒業した生徒のうち中不生徒は何人いましたか。  
 ④ ②の生徒についてお聞きします。

無事に卒業できた主な要因として考えられることの中から優位なものを3つ選んで下さい。

- ・環境の変化
- ・学業の頑張り(就職、進学に対する熱意等)
- ・個人の内面的な要因
- ・家庭の協力、支援
- ・学校関係者の支援
- ・級友等の支え
- ・部活動など校内活動の充実
- ・その他( )

⑤ 中不生徒で卒業できなかった生徒についてお聞きします。

ア 卒業できなかった主な要因として考えられることを3つ選んで下さい。

- ・学業不振
- ・交友関係
- ・家庭の経済的事情(家計を助けるための就職・アルバイト等含む)
- ・親子関係
- ・本人の個人的、内面的なものに起因する問題(性格、発達障害等)
- ・病理的な問題(病気、入院、治療等)
- ・不登校状態(原因がはっきりしていない)
- ・その他( )

イ 卒業を支援するためには今後どのような援助が特に必要と思われますか。複数回答可

- ・中学校との連携
- ・学習面の基礎・基本の定着を図る
- ・生活面の指導、支援
- ・家庭との連携
- ・就職・進学等の進路指導
- ・相談機関、医療機関との連携
- ・その他( )

⑥ 特に学習面で中不生徒は他の生徒と比較してどのような違いがありますか

⑦ 貴校における不登校生徒対応について現状、問題点、要望等

定時制・通信制高等学校教育相談担当者への質問事項 NO. 2

◎ H22年度入学生についてお聞きします。

1 入学した生徒のうち中不生徒は何人いますか。(回答時に把握されている人数)

2 1の生徒が中不生徒であると最初に確認した状況は次のいずれが多いですか。1番目と2番目を番号でお答え下さい。

① 調査書の記載  
 ② 電話での聞き取り  
 ③ 中高連絡会等の面談  
 ④ 本人・保護者からの聞き取り  
 ⑤ その他( )

3 特に中不生徒に関して、入学後に心配されることはどんなことでしょうか。

例

- ① 授業内容についていけるか
- ② 高校の生活リズムに適應できるか
- ③ 人間関係を上手につくれるかどうか(学年やクラス)
- ④ 教職員との関係を上手につくれるかどうか
- ⑤ 家庭での生活環境
- ⑥ アルバイト等の職場での様子
- ⑦ その他( )

4 中不生徒に対する入学後のはたらきかけについて

例

- ① 入学後に個人的に担任等が面談を行っている
- ② 特別なグループを組織したり支援体制を組んで対応している
- ③ 入学後に職員会議等で共通理解を図っている
- ④ 個人の状況に合わせて個別に対応している

5 中不生徒に対する学習支援について  
例

① 個別に支援を行っている。  
② 組織的に支援を行っている。  
③ あくまでも個人対応であり他の生徒と同じ  
④ 教師側に時間の余裕がなく支援を行うことができない。  
⑤ 支援を受けたがらない  
⑥ その他( )

6 中不生徒の対応として特に中学校との連携を考えた場合、どのようなことが必要と思われるか 複数回答可  
必要と思われる順番で、番号の記入をお願いします。  
① 入試前の中高連絡会(共通理解)  
② 入試後、入学前(3月中)の中高連絡会(共通理解)  
③ 4月の年度当初での連絡会  
④ 中学校在籍時、高等学校訪問や説明会への保護者や本人の参加  
⑤ 中学校在籍時に関わっていた通称指導教室などの相談機関との連絡会  
⑥ 入学後の定期的な連絡会  
⑦ その他( )  
連絡会:実際の話し合い、電話、メール等を含む

7 中学校への要望・意見

定時制・通信制高等学校教育相談担当者への質問事項 NO. 3

22年度現在  
他校から転校・転入してきた生徒の高校入学後の追跡調査

1 ドロップアウトの時期  
① 高校1年  
② 高校2年  
③ 高校3年  
中学校時に不登校を経験している割合

2 転入時期  
① 高校1年  
② 高校2年  
③ 高校3年  
④ その他

転入理由  
① 病気(身体的)  
② 病気(心理的) 主に本人もしくは親族に起因している  
③ 学業不振  
④ 経済的理由  
⑤ 校則違反等生徒指導面(退学等)  
⑥ 不登校(いじめなど主に本人・親族以外のことが起因している)

途中入学者の特徴

3 卒業できた割合(H21年度卒業生)

4 卒業できなかった主な理由

5 特に、入学後に心配されることはどんなことでしょうか。 複数回答可  
例  
① 授業内容についていけるか  
② 高校の生活リズムに適應できるか  
③ 人間関係を上手につくれるかどうか(学年やクラス)  
④ 教職員との関係を上手につくれるかどうか  
⑤ 家庭での生活環境  
⑥ アルバイト等の職場での様子  
⑦ その他( )

6 入学後のはたらきかけについて 複数回答可  
例  
① 入学後に個人的に担任等が面談を行っている  
② 特別なグループを組織したり支援体制を組んで対応している  
③ 入学後に職員会議等で共通理解を図っている  
④ 個人の状況に合わせて個別に対応している  
⑤ 他の生徒と同じ。特別な配慮はしていない